

# 哲学カフェのすすめ

## まちづくりの場として

徳山工業高等専門学校准教授 小川 仁志



### なぜ哲学カフェだったのか

哲学カフェとは、誰でも入ることのできるカフェを舞台に、気軽に哲学を楽しもうという企画であり、もともとはフランスのマルク・ソーテという人物が、パリのカフェにおいて始めたものである。哲学という一見難しく硬い学問を、カフェという日常の地平にもってこることで、広く市民に門戸を開こうとする試みであるといえる。

私の場合、市役所でまちづくりに携わっていた経験から、哲学を通して何かまちづくりができないか模索していた。そこで知ったのが、ヨーロッパで盛んな哲学カフェという試みであった。学生や市民が一緒になって、自分たちの社会のことを深く考えることで、少しでもまちが良くなるのではないかと考えたのである。そこで、会場には商店街の空き店舗を選んだ。とりわけ地方都市では、商店街の活性化がまちづくりの象徴になっているからだ。学校内で開くより敷居が低くなり、交通の面でも利便性が高まるというメリットもあった。そして思惑どおり、学生だけでなく、会社帰りのビジネスマンから買い物帰りの主婦や高齢者の方まで、非常にバラエティに富んだ参加者に恵まれることとなった。

### 内容と特徴

カフェは、おおむね隔週で約1時間開催することになっている。少し物足りないが、集中して考えるにはこれくらいがちょうどいい。答えよりも、考えるプロセスを重視しているからだ。リラックスして考えられるように、お菓子や飲み物を用意し、歌詞のない音楽をかけるようにしている。

特徴としては、開始に当たって毎回次のよう

なルール説明を周知徹底している。①人の話をよく聞く、②他人の意見を全否定しない、③難しい言葉を使うときは説明する。以上の3点である。これによって、日本人特有の議論の際の険悪なムードがなくなり、なごやかにかつ建設的な議論ができるようになっていく。その上、幅広い層の参加者が同じ土俵で議論することができる。

このように全員が平等な立場で参加できるように工夫しているわけだが、これを実効性あるものにするため、ファシリテーターを置き、あらかじめ役割を明確にしている。これまでのところ、主宰者である私自身がファシリテーターを務め、進行役を担っている。

その他名簿と名札を用意しているが、記載はニックネームでも可としている。これは、お互いに肩書や素性を意識せず、言いたいことが言えるようにするためである。

テーマの設定については、基本的には年度当初に世の中の動向を見ながら私が決めている。ただ、日頃参加者からの要望も聞いているので、できるだけその意見を取り入れるようにはしている。まちづくりというのは幅広い概念なので、何をテーマにしても、何らかの形で社会をよくすることにつながってくると思うからだ。

たとえば最近のテーマでは、「自然災害とは何か?」や「死刑は廃止すべきか?」というものを扱った。

### 参加者の反応と課題

もともとの狙いは、自分の頭で考える機会を設け、ひいてはまちづくりにつながるようになることであった。もちろん純粋に哲学を楽しんでもらうという目的もあった。この目的については、私が想定した以上に成果を上げ、思考力

どころか、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上にもつながっているようである。思考の結果を、相手に伝わる明確な言葉にまとめ上げて表現するのは、プレゼンテーションのための、つまり人前で意見をいうためのいい訓練になっている。コミュニケーションの向上についても同じである。哲学カフェでは、人の話をよく聞いて、それにうまく反応できないと対話が成立しない。

また学生にとっては、意外なことに哲学カフェが就職の際の面接練習や集団討論の場としても役に立っていたようである。さらに、今世代を跨いだ対話の場が極端に少なくなっている。それどころか世代間対立という言葉さえささやかれる時代である。そんな中で若者の意見と市民、とりわけ高齢者の意見が同じ土俵でぶつかり合う哲学カフェは、貴重な世代間交流の場にもなっている。

その意味で、参加者の反応は上々であるといえる。どの世代の参加者もそれぞれの目的を達成し、同時に想定以上の喜びを得て帰っていく。だからこそ、毎回最後には自然と拍手が沸き起こる。決して主催者である私を称えているのではなく、参加者同士がお互いの健闘を称え合っているのである。

とはいえ、哲学カフェの未来も決してバラ色ではない。この数年間の実践を通じて、課題も見えてきた。それは、どうしても参加者が同質のメンバーに限定されることである。バラエティに富んでいるとはいえ、やはり哲学に多少は興味のある人たちである。本来は哲学などまったく興味がないという人にこそ参加してもらいたいのだが、強制するのも趣旨に反する。誰にとってもより魅力的な時空間を提供できるよう、私も一層の工夫を模索したい。

## 哲学カフェのすすめ

哲学カフェに参加することの意義はもうすでに述べたので、最後に哲学カフェを自分で開いてみることの意義についてお話ししておきたい。

最初にやるべきことは、どういう目的で開催するのかを決めることである。どんなイベント

にも趣旨がある。それによって、スタイルや場所が決まってくるものだ。たとえば、参加者が各々哲学を楽しむといったオーソドックスな目的から、市民のシンクタンクにするといった高度な目的まで。ちなみに私のカフェは、あまり大上段に構えず、主に市民が思考する場を提供するという目的のもとで開催している。間接的にそれがまちづくりにつながればいいというスタンスだ。

運営スタイルは、その目的に応じて設定すればよい。具体的には対話のレベル、ファシリテーターの役割、場所、日時、頻度、参加者の人数および属性、告知方法等。ファシリテーターは対話の調整役に徹して、あまり強引に議論を引っ張らないほうが、自由な対話が展開するだろう。必ずしも哲学の知識は必要ない。誰もがわかりやすい言葉を使ったり、説明を加えるなら、問題ないからである。

成功させるための一番の秘訣は、いかに話を盛り上げるかだ。それは主にファシリテーターの役割になってくる。まず全員参加の雰囲気をつくるのが大事だ。方法は簡単。最初に質問をして、全員に挙手をしてもらうのだ。自分の立場が明確になるような質問をするのがいい。そうすると当事者意識が芽生える。可能なら、対立軸をつくると、終始関心を維持することができる。人は対決していると思うと熱が入るものだ。

もう一つ、「お笑い」を取り入れるのもいい。せつかく集まっても、硬い話を硬い雰囲気のままやるのでは楽しくないからだ。真面目な話を時にユーモアを交えて語り合えるというのは、実に楽しいものである。笑いの絶えない明るい対話からは、きっと明るいまちが生まれるに違いない。楽しい哲学カフェが日本中の至る所で開かれることを願ってやまない。

おがわ ひとし 1970年生まれ。米プリンストン大学客員研究員、商社マン、フリーター、公務員を経た異色の哲学者。商店街で「哲学カフェ」を主宰するなど、市民のための哲学を実践している。著書に『哲学カフェ!』（祥伝社、2011年）、『日本の問題を哲学で解決する12章』（星海社、2012年）など多数。